

# 『観音経』の日本的展開

吉澤 秀知

## はじめに

『観音経』とは、鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』『観世音菩薩普門品第二十五』のことである。日本仏教宗派では各種法要の際にも読誦されることの多い有名な経典の中の一つである。『観音経』の主人公である観世音菩薩に関する霊験譚は多数あり、また『観音経』、観世音菩薩に関連した出版物や、寺院における講話や法話の類いは数限りなくある。日本だけでなく大乘仏教を信仰する諸地域においても、多くの人々の心の拠り所となっている。東アジアの仏教圏では、この経典の主人公である観世音菩薩像が数え切れないほど大小様々に祀られ、「念彼観音力」の文句とあわせて観音信仰が力強く根付いている。日本各地では観音霊場が生まれ、多くの人々が巡礼のために集まってくるほどである。

しかしながら、『観音経』とは何か、観世音菩薩とはどのような菩薩なのかということになると、はっきりしない部分が多いと言わざるを得ない。はたして我々は、日常的に読誦される経典であるにもかかわらず、その経典の語句の意味や内容を理解できているのだろうか。この経典に説かれる内容は、表面上は分かりやすいものではあるが、経典の語ろうとしている本質を掴んでいるのであろうか。何故『観音経』が日本において多くの人々に受け入れられてきたのか、このような部分を解明する方法として、梵文『観音経』と鳩摩羅什訳『観音経』について一語一句の比較検討を行った。

それによりあらわれたのは、梵文原典と漢訳という言語体系の違いだけでは説明のできない文章構造の改変である。翻訳に使用された原典がどのようなものであったかは不明であるが、現在見ることでできる鳩摩羅什訳『観音経』は、様々な部分で原典にはない語を補うことで、当時の中国の人々にとって『観音経』をわかりやすくなるように考えて、苦心して翻訳されたのであろうことは想像に難くない。また、多くの先人達の研究によってこの『観音経』に説かれる内容が分析され、七難・三毒・二求両願・三十三身十九説法という分類がされ、仏教の修行体系にあてはめ、研究がなされてきた。

本論では、経典の内容と修行体系の分類をもとにしつつ、原典との比較から見える、鳩摩羅什によって付加された様々な語句によって作り上げられた文章構造、特に『観音経』内に組み込まれた「聞・持・称」の構造、称名の階梯、修行体系などについて、また、何故このような階梯を組み込む必要があったのかを考察する。観世音菩薩を信仰することによる現世利益を説きつつ、仏道に進む方法を示しているこの『観音経』が日本に受け入れられたのは何故か、『観音経』が説き示そうとしたことは何かを解明することを目的とする。

## 1. 『観音経』について

『観音経』の本体である『妙法蓮華経（法華経）』は、数ある大乘経典の中でも「諸経の王」とも言われ、中国、日本において広く信仰されてきた。この『法華経』の原典はサンスクリットで作られたもので、18世紀以降、その梵文写本がインドをはじめとしてチベット・ネパール・中央アジアなどで発見され、多くの研究者によって研究が続けられている。

古来、『法華経』の漢訳は六訳三存といわれ、以下の三訳が現存するのみである。

- ・『正法華経』 竺法護訳、286年、大正蔵第9巻、No.263。
- ・『妙法蓮華経』 鳩摩羅什訳、406年、大正蔵第9巻、No.262。

・『添品妙法蓮華經』 閻那崛多・笈多共訳、601年、大正蔵第9巻、No. 264。

一般的に『法華經』について言及する際には、鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』のことを指す。この『法華經』は日本語、英訳、チベット語訳、ウイグル語訳、西夏語訳、モンゴル語訳、朝鮮語訳など、様々な言語に翻訳され、多くの人々に読まれている。

『観音經』は鳩摩羅什訳『妙法蓮華經』の25番目に位置する「観世音菩薩普門品」を単独の經典として扱ったものであり、「普門品」とも呼ばれる。また、偈頌のみを読誦することも多く、「世尊偈」と言うこともある。鳩摩羅什の『観音經』では「長行」といわれる散文部分のみが訳され、梵文原典にある「偈頌」の部分については、漢訳当時の『法華經』の中には訳されていないと言われている。この偈頌部分に関しては竺法護の『正法華經』においても訳されていない。現行の『観音經』は、『添品法華經』の「観世音菩薩普門品」において漢訳された偈頌を編入したものである。

観音經の原語は、『『すべての方角に顔を向ける章』と名付けられる観世音菩薩の神変の解説』(samantamukhaparivarta-nāma-avalokiteśvara-vikurvaṇa-nirdeśa)である。鳩摩羅什はこのタイトルを「観世音菩薩普門品」とし、鳩摩羅什以前の翻訳である竺法護の『正法華經』では「光世音普門品」と漢訳している。

『観音經』における最大の謎は、「観世音／Avalokiteśvara」という名前(および原語)である。章題にも「観世音」と「光世音」があり、他の經典に出てくる際には「観自在」という語まであり、全ての言語が異なっているのではないかという疑いが生じることは当然のことであろう。經典の本文には「何故『観世音／Avalokiteśvara』といわれるのか」という疑問があるので、その答えが『観音經』の内容であることは想像に難くないのであるが、それにもかかわらず、梵漢どちらの名称についても決定的な答えは未だ見出されず、研究者が様々なアプローチで研究を続けている。<sup>(1)</sup>

『観音經』は観世音菩薩を信仰する功德を説く經典である。観世音菩薩の

名前の由来を無尽意菩薩が釈尊に問う場面から始まり、観世音菩薩の威神力の賞賛、礼拝・供養による功德に関して説かれ、重頌によって再説される。

以下、『観音経』の構成に関する伝統的な分類を示しておく。

①七難：火難、水難、風難（羅刹難）、刀杖難、鬼難、枷鎖難、怨賊難の七つ（偈頌では十二難）

②三毒：姪欲（貪）、瞋恚（瞋）、愚痴（痴）の三つの根本的な煩惱

③二求：男児であれ女児であれ、望み通りの子供を求める<sup>(2)</sup>

④三十三身十九説法：観世音菩薩は対象に合わせた姿で説法し、得度に導く<sup>(3)</sup>

⑤布施：瓔珞の供養<sup>(4)</sup>

これらは注釈書類において仏教教理的に分類され、様々な観点から解説される。

## 2. 『観音経』の構造に関する検討

『観音経』は原典の内容が簡潔でわかりやすいことが多くの人々に受け入れられた要素の一つであるが、同時にそれを翻訳した鳩摩羅什の功績による所が多いと推察される。鳩摩羅什訳『観音経』を解説するにあたり重要なことは、鳩摩羅什の漢訳の美しさと、様々に施された鳩摩羅什による仕掛け、意図的な操作を見つけるということにある。それは、鳩摩羅什の思想の理解につながるものであろう。

以下にいくつかの例を採りあげて文章構造を検討してみたい。<sup>(5)</sup>

### 2-1. 章題「普門」について

章題にも示されるように、『観音経』とは「普門品」のことである。観世音菩薩の神変（vikurvaṇa / vikurvā）に関して説き示される。この「普門」という語は、サンスクリット語の意味から「あらゆる方角（方向）に顔を向けている」と解釈される。このことから、観世音菩薩があらゆる人々の願い

や救いの声に耳を傾け、彼らのために救いの手を差し伸べて解脱へと導くことを説く、いわゆる「七難」や「三十三身十九説法」をもとにして「普門」の意味として解釈したものである。十一面観音像や千手観音像をはじめとする多数の変化観音像は、このような解釈を仏像に取り入れることで作成された。

「普門」の原語は samantamukha である。この語の意味するところを少し検討する。

辞書の記述によれば、「samanta」は、「連続している、完結した、完全な、普遍的な、あらゆる方向にある」などの意味がある。これを漢訳したものが「普」である。「mukha」は「口、顔、表面、出入り口」などを意味する語であり、「門」と訳された。漢字の「門」には、「狭い入り口、物や人が出入りするところ」という意味がある。原典作者の意図は不明であるにしても、訳経者は mukha に対して「表面」を意味するイメージよりも、「入り口」というイメージを取り入れた解釈を採用したと考えられる。

一方で、mukha は、上記に示した表面や入り口といった意味に加えて、「入門、序論、introduction」といった物事の始まりという意味で用いられることがある。このことを考え合わせると、竺法護や鳩摩羅什が章題としての samantamukha の訳語である「普門」に取り入れた意味内容は、「あらゆる方向に入り口（門）をもつ」や、「全てのものに対して門戸を開いている」と考えることができる。これは、一カ所だけに門があるのではなく、四方八方上下の全てに壁となるものがなく、入ることが可能、どこを切り取っていても仏の教えが示されているということが出来るということである。しかも衆生が仏道修行に入るための第一歩（入門）ということの意味して「普門」が使われている。つまり、『観音経』には仏教入門書、または仏教概論といってもよい役割を持たせようとしていたことが推察される。『観音経』の最後には「仏説は普門品時衆中八万四千衆生皆發無等等阿耨多羅三藐三菩提心」とあることからわかるように、この経典を聞いた八万四千の衆生が菩提心<sup>(6)</sup>を起こす（発心）と宣言しているのである。より高度な覚りを得るという

意味に取ることが可能であるが、『観音経』には仏教教義に基づく用語や議論は見出されない。一般的に言えば、すでに仏門に入っている者が菩提心を起こすということは考えにくいのであるから、この經典に説かれる内容は、仏教を知らない人や出家したばかりの初学者が対象となるということであろう。

加えて、長行（散文）部分の後半には、釈尊による観世音菩薩に対する環珞の供養の勧めと、多宝仏に対する供養が説かれる。この内容からは、『観音経』が布施の功德を説く經典であることが示されているとも言える。大乘仏教では菩薩の修行として六波羅蜜が強調されているが、菩薩行の第一段階として布施の完成（布施波羅蜜）を重視しており、そこから六波羅蜜の修行を積み上げつつ、智慧の完成を目指していくのである。大乘仏教の入門者にとっては信仰の重要性を説き、礼拜供養の意味と布施の方法を説く『観音経』は、最適な入門書であり、だからこそ広く民衆に受け入れられたものと考えられる。

## 2-2. 「聞・持・称」の構造

『観音経』の前半では、「音」を重視していることが読み取れる。鳩摩羅什訳『観音経』では、原典にはない「観其音声」という文句を補うことで、「なぜ観世音なのか」という無尽意菩薩の質問に対する答えとしていることから言えることであろう。しかしながら、鳩摩羅什がたった4文字のこの語句を加えたことで、原典に触れることのない人々にとって、『観音経』と観世音菩薩の正体がわかりやすく伝わるようになり、同時に仏教信仰に突き進む人々の出発地点としてふさわしい經典となったのではないだろうか。

前半は「観世音」という名に関わり、七難における重要な語として「聞・持・称」の3語が示される。観世音菩薩の威神力によって七難から逃れることができる具体例を挙げながら説明しつつ、同時に「聞」と「持」と「称」という語を本文の中で段階的に示すことで、いかにして仏教あるいは観世音菩薩に対する信仰の初期段階に入っていくのかを示そうとしている。

七難の総説として以下の一文がある。

「若有無量百千万億衆生受諸苦惱。聞是觀世音菩薩。一心称名。觀世音菩薩即時觀其音声皆得解脫」  
(大正蔵 9 卷56c6-8)

iha kulaputra yāvanti sattva-koṭī-nayuta-śata-sahasrāṇi yāni duḥkhāni  
pratyanubhavanti tāni saced avalokiteśvarasya bodhisattvasya mahā-  
sattvasya nāmadheyam śṛṇuyus te sarve tasmād duḥkha-skandhāt  
parimucyeran. (荻原・土田 1958, p.362)

(訳：善男子よ、ここに数百・千・コーティ・ナユタに及ぶ衆生がいて、  
諸々の苦しみに耐えている、その彼ら〔衆生〕がもし觀世音菩薩摩訶薩  
の名前を聞くならば、彼ら全て〔の衆生〕が、その苦しみの塊から解放  
されるだろう)

この文章に対して、『正法華経』では以下のようにになっている。

「此族姓子。若有衆生。遭億百千炫困厄患難苦毒無量。適聞光世音菩薩  
名者。輒得解脫無有衆惱。故名光世音」  
(大正蔵 9 卷128c24-27)

漢梵を比較すると、梵文原典にはない「一心称名。觀世音菩薩即時觀其音声」が挿入されていることは一目瞭然である。

梵文においては、衆生が觀世音菩薩の名前を「聞く」だけ、言い換えれば耳にただけで救われると説いているのである。たとえ仏教のことも觀世音菩薩のことも知らない人であっても、ひとたび「觀世音／avalokiteśvara」という言葉（音声）を聞くだけで、觀世音菩薩はその人を救ってくれるという、すばらしい力があると考えているのである。しかもこの一文が無尽意菩薩による「何故『觀世音』と呼ばれるのか」という質問の返答であるとしている。

また、「聞是觀世音菩薩」とすることによって、この「觀世音菩薩」という語が菩薩の名前ではあるが、同時に音であるということを示そうとしている。梵文では「もし觀世音菩薩摩訶薩の名前を聞くならば (saced avalokiteśvarasya bodhisattvasya mahāsattvasya nāmadheyam śṛṇuyus)」とあり、

明らかに名前（nāmadheya：名称、命名）という語を使っているが、漢訳では使われていない。このように内容操作することによって、鳩摩羅什は意図的に、「観世音菩薩」という言葉が名前だと知りながらも、何を指しているのか理解できていない人々であつても救済対象となるということを示していると考えられる。<sup>(7)</sup>

さらに鳩摩羅什はこの文章に「一心称名」を付け加えている。<sup>(8)</sup>おそらく、原典通りに観世音菩薩の威神力を認めつつも言葉だけで救われるというのは、仏教を伝道する立場にある者にとっては不都合であり、人々の信仰を篤くするためには、ひたすら名前を称えるという行為が必要であると考えて、内容を先取りして「一心称名」という語を用いたのであろう。さらに「観其音声」を付け加えることによって、言い換えれば、必死に救済を求める人々の心を観世音菩薩が感じ取って、威神力によって救済されると読み変えることによって、信仰の重要性を説いているのであり、この部分に鳩摩羅什の意図が隠されている。

この「聞」の働きによって「持」が生じる。漢訳では「観世音菩薩」という言葉を聞くだけで人々は救われると説かれている。しかしこれは信仰の度合いが極めて薄く、聞いて、それを「観世音菩薩」という名前だと認識し、その上で「心にとどめて記憶する」ことが信仰をするに際して重要であることを示そうとしている。『観音経』において「持」はこの第一難に使われる一度だけである。これ以降は「受持」に変わる。これは総説と第一難において「聞→持」（＝受持）という形式を作り、そして、これを前提として心に積み上げた上で「称」、つまりその名前を声に出すという行為によって信仰がさらに篤くなるとしたのである。このことから『観音経』が作り出そうとした信仰の階梯は「聞→持→称」ということになる。

「聞→持」が、「聞く」という受動的な行為を受ける形で、どこかで聞いた名前を忘れずに心の中に思い浮かべて「受持」という形になるとするならば、この「持」と「受持」には大きな違いがある。第一難においては、「観世音／avalokiteśvara」という言葉を聞いて覚えていただけであり、観世音菩薩

のことを知らず、名前とも認識していない可能性がある。しかし、「受持」が観世音菩薩のことを認識し、受け入れ、信仰するということを意味内容として持つならば、この「持」と「受持」には大きな違いが現れるのではないだろうか。それ故に、鳩摩羅什は、第一難においては「観世音」という言葉をどこかで耳にしたことがあるということを示し、それ以降は観世音菩薩のことを信仰しているという段階を踏んでいることを示すために「受持」という語を使用しているのではないだろうか。<sup>(9)</sup>

## 2-3. 「称名」の段階

称名は、簡単に言ってしまうと、「名前を称える」という行為のことであるが、称名にはいくつかの方式が考えられる。人格の偉大さについて讃歌や文学的な方法によって示す、偉大さを様々な特徴を表した名称を用いることによってその榮譽に言及すること、名前を繰り返すことによって偉大な人物に救済を求め呼び出すなど、様々な方法が称名にある。『観音経』における称名であっても同様の効果を持つものであろう。

鳩摩羅什は七難においては「聞→持→称」の構造を作り、信仰の行為を積み上げることで上位段階としての「称名」を強調しようとしたことを前項において検討した。

さらに『観音経』の構造をみるために、梵文原典と漢訳の七難の「称名」について比較してみよう。

- |                                          |            |
|------------------------------------------|------------|
| ① nāmadheyaṃ dhārayiṣyanti               | 持是観世音菩薩名者  |
| ② ākrandaṃ kuryuḥ                        | 称其名号       |
| ③ ākrandaṃ kuryāt                        | 称観世音菩薩名者   |
| (anena khalu punaḥ kula-putra kāraṇena…) | (以是因縁名観世音) |
| ④ ākrandaṃ kuryāt                        | 称観世音菩薩名    |
| ⑤ nāmadheya-grahaṇena                    | 聞其称観世音菩薩名者 |
| ⑥ nāmadheya-grahaṇena                    | 称観世音菩薩名    |
| ⑦ nāma-grahaṇena                         | 称其名故       |

第一難は、総説の観世音菩薩の名前を「聞く ( $\sqrt{sru}$ )」ということを受け、  
た「受持する ( $\sqrt{dhr}$ )」ということであり、漢訳の場合同様、信仰の低い段階を示すために使われる。

これを受けて、第二・三・四難では「ākrandam  $\sqrt{kr}$ 」が使用され、そして第五・六・七難で「nāma(dheya)-grahaṇa」に変わっている。これらふたつの語に大きな差異があるのかもしれない。

「ākrandam  $\sqrt{kr}$ 」は、「(助けを求めて) 大声で叫ぶ」ということを原意として持っており、「観世音菩薩」など意味のあることを叫ぶのかどうかは、辞書などからは確認することはできない。つまりただ助けを求めるだけでもよいし、「観世音／Avalokiteśvara」という音声を発するだけでいいのかもしれないということが想像できる。しかし「nāma(dheya)-grahaṇa」は、辞書に「nāma-grahaṇa」をとって「mentioning a name」という意味があげられているように、確実に観世音菩薩の名前、称号を言うことが想定されている。上記二つの間には大きな違いがある。おそらくここで考えられるのはākrandam  $\sqrt{kr}$ よりもnāma(dheya)-grahaṇaは、上位の階梯に位置する行為であるということである。

以上のように、称名の原語を並べることによって、漢訳において見られた「聞・持・称」と同じような構造を見いだすことができるのである。すなわち、nāmadheyaṃ  $\sqrt{sru}$  → nāmadheyaṃ  $\sqrt{dhr}$  → ākrandaṃ  $\sqrt{kr}$  → nāmadheya-grahaṇa / nāma-grahaṇa という構造で七難が構成されているのである。これは漢訳よりも一項目増えているように見える。しかしながら、「ākrandam  $\sqrt{kr}$ 」の持つ意味が「大声で叫ぶ」ということであるならば、これは「称～名号」に相当すると考えることができる。「名号」を単に「呼び名」として使っているだけではなく、同時に「号」という文字に重要な意味を持たせて「名前を大声で叫ぶ」ということまでも含んだ語として考えていたということなのであろう。

漢訳の場合は、「持」が第一難にあり、第二難～第七難までは「称…名」として表されている。しかしながら、第五難に「聞其称…名」とあり、ここ

では原文に無い「聞」を付け加えることで観世音菩薩に対する信仰を持って称名することを示そうとしている。これに続く第六、七難においては再び「称…名」に戻っているが、これは第五難にある「聞其」を内包させることで、梵文同様に第四難までの称名との違いを表すことを意図していると考えられる。

## 2-4. 常念と三慧

『観音経』では観世音菩薩を常に念じて恭しく敬えば貪瞋痴の三毒を離れることができると説かれている。「常念恭敬」にはどのような役割があるのか。

「常念恭敬」に対応する位置にある原語は「namaskāraṃ √kṛ」であって、訳語としては「恭敬、頂礼、稽首」などであるので、「恭敬」や「礼拝」の訳語は許容される範囲である。この語は、本来であれば、三毒においては「恭敬」だけに対応するもので、「常念」に相当する語は原典には無い。三毒の後に説かれる二求両願においても同様に使われている語であるが、その際には「礼拝供養」と別の語で訳されている。ちなみに『正法華経』の対応部分では「稽首帰命」とあるのは直訳といってよからう。翻訳に使った原典にこの「常念」の語があったかどうかは不明であるが、鳩摩羅什が何らかの意図を持って付け加えたということであろう。何故、付加する必要があったのか。

梵文原典にあるのは七難の称名と、三毒・二求における帰依の行為のみである。

それにもかかわらず、漢訳『観音経』では、七難・三毒・二求両願が三業（身・口・意）に対応すると解釈するのが一般的である。鳩摩羅什は、漢訳する際に原典には無い「常念」の語を付け加えることで、この經典の構成を聞・思・修の三慧<sup>(10)</sup>にも重ね合わせることで、仏教の修行階梯をより強調できると考えたのではないだろうか。

仏教においては、聞・思・修の順番で修行することが重要である。『観音

経』においてもこの三慧の順番を組み込もうとしたとしてもおかしくはないだろう。

鳩摩羅什訳『観音経』における七難・三毒・二求の構成を、三慧（聞・思・修）と三業（身・口・意）に対応させると次の通りになる。

七難 = 口 : 聞 : 一心称名

三毒 = 意 : 思 : 常念恭敬

二求 = 身 : 修 : 礼拝供養

『観音経』において、七難が強調するのは称名である。称名するために必要な準備行為としては観世音菩薩の名前を聞かなければならないとする。称名は、聞いた上で自身の口で観世音菩薩の名前を称えるのであるから、三業では口業、三慧では聞慧に相当する。

二求には、観世音菩薩に礼拝供養することで願いが実現すると説かれている。礼拝や供養という行為は、邪念を捨て、自身の身体をもって繰り返し行う奉仕行為とも言えることから三業では身業に相当すると見られる。しかも文中に「福德智慧之男」、「宿殖徳本」の語があることから三慧の修慧に重ねようとしていたということが推測される。<sup>(11)</sup>

三毒については、原典にあるまま訳しただけでは、三慧の思慧に当てはめることが困難である。三毒（貪・瞋・痴）は心の働きの中に悪を生じるものであるので、三業の意業と考えて問題はなかろう。文中に「常念」の語を組み込むことによって始めて三毒の働きから別の構成へと変えることができる。鳩摩羅什が意図したのは、尊敬の行為（namaskāra）には信仰の心が必要である、すなわち観世音菩薩のことを常に心に思い浮かべ、考える（常念）ことを前提としたのではないだろうか。こうすることでようやく三慧の思に対応することができるのではないだろうか。

七難・三毒・二求を身・口・意の三業に当てはめて解釈することは一般的になされている。しかし『観音経』では、通常考えられるような身口意の順番、すなわち意業を重視することなく、口・意・身の順番で説かれている。これは観世音菩薩に対する身体による奉仕行為である礼拝供養を最も重要な

行為であるとしたかったからなのであろうか。少なくとも表面上は観世音菩薩に対する行為としては、口→意→身の順番で説かれており、礼拝供養が重要な位置に置かれている。確かに二求に続く文章では、六十二億劫河沙の菩薩の名前を受持し、彼らに供養することで積まれる功德は、観世音菩薩の名前を知って一度でも礼拝・供養する功德と等しいとまで考えているのである。

しかし、鳩摩羅什の『観音經』に三慧の階梯が組み込まれていると想定すると、説かれている内容は、聞→思→修の順番で修行の階梯が積み上がっていくと見ることができ、実践的な繰り返しの修行（修慧）が最も重要な行為となるのである。

梵文『観音經』に説かれる七難・三毒・二求に対して、鳩摩羅什が「常念」の文字を付け加えたのは、身・口・意の三業を示すためではなく、聞・思・修の三慧という仏教の重要な修行階梯に対応させるためだったのではないだろうか。つまり、『観音經』を実践する者が自然と仏教の最初期の修行体系に入っていけるように企図したのではないだろうか。

## 2-5. 「観世音」とは何か

鳩摩羅什訳『観音經』における「観世音」について考察しておきたい。<sup>(12)</sup>『観音經』は「なぜ『観世音』なのか」という質問から始まる。それに釈尊が答えることで物語が進み、「若有無量百千万億衆生受諸苦惱。聞是観世音菩薩。一心称名。観世音菩薩即時觀其音声皆得解脫」という総説の一文が質問の答えであることに疑いはない。「音声を観じる」から観世音であると考えていたことが分かる。そこで、以下に「観其音声」と観世音との関係について検討する。

観世音菩薩の名前を一心に称えることで、観世音菩薩はすぐにその音声を観じてすべてのものを解脱させる、と説かれている。漢訳では「観世音菩薩。即時觀其音声」とあるが、この句も梵文原典に対応する文は見当たらない。「観其音声」に続く「皆得解脫」に対応する梵文原典は「te sarve tasmāduḥkḥaskandhāt parimucyeran（彼ら全てのもの達はその苦の集まりから解

き放たれるであろう)」である。原典からは衆生が様々な苦悩から解き放たれるとあるが、漢訳の「皆得解脱」は、一般的には「解脱を得させる」と書き下され、観世音菩薩が衆生に解脱を得させると使役的に読ませている。これは使役的に読むことで、観世音菩薩の主体性がはっきりと表現されることになり、観世音菩薩が人々を様々な苦悩から抜け出させようとするのである。

「即時観其音声」という一文も鳩摩羅什によって付加されたと考えられる。この部分になぜこのような語句が付加されたのであろうか。

ここでは「即時」という語が使われている。<sup>(13)</sup>「即時」と示すことで、観世音菩薩の名前を聞く、あるいは一心に名前を称えれば、その行為の結果として、すぐに観世音菩薩が助けを求める衆生の声を感じ（観）じ取って、何らかの力（威神力）によって救済してくれるというのである。観世音菩薩とは、時間をおいて後から助けてくれるというのではなく瞬時に救済するということを示そうとしているのであろう。

では、「観其音声」は何を意味しているのであろうか。救いを求めている衆生が観世音菩薩の名前を称えているのであれば、「観じる」ではなくて、「聞く」となるのが普通ではないだろうか。ところが「音声を観じる」という文章になっている。羅什は何を意図してこのような語を用いたのか。観世音菩薩は、ただ衆生の声を聞いているのではなくて、名前を称えているその人の心を観じているのではないだろうか。

「音声」は、一般的には、人の発する声を意味する語である。この意味であればやはり「観じる」ではなく「聞く」はずである。しかし、「観」は、「注意して見る」「判断する」という意味もある。このような内容で「観」を考えると、ここで使われている「音声」とは、人が発するただの声ではなくて、その音声のもつ意味内容、あるいはその発言に込められた思い、そのときの心の状態（信仰心）などを示していると考えられるのである。ただ誰かが発した声を聞いて観世音菩薩が助けるのではなくて、助けて欲しいという願いを込めてひたすら観世音菩薩の名前を称えていることを、観世音菩薩ははっきりと見極めているのだろう。それが「音声を観じる」という意味

なのではないだろうか。

「観其音声」の文中にある指示詞「其」は、一般的には「衆生」を受けると考えられているので、「衆生の音声を観じる」ということになる。しかし指示詞は語句を受けることも出来るので、「衆生」ではなく「一心称名」を受けるとほうが良さそうである。つまり「(一心に観世音菩薩の名前を称えている) 音声を観じる」という意味に読むこともでき、衆生の「行為」を観察していると考えてもよいのではないだろうか。

なぜ「観世音」と呼ばれるのかという質問に対して、直接的な答えは、「観其音声」であると考えられる。そこで質問にある「観世音」と、総説にある「観其音声」の関係について考えてみたい。「観其音声」と「観世音」とを対比してみると次のようになる。

観 → 観

世 → 其 (一心に観世音菩薩の名前を称える世間の人々)

音 → 音声

このように、「観世音」の「観」と「音」が、それぞれ「観」「音声」に相当することは文字のとおりである。先にも述べたとおり「其」は一般的には「衆生」を受けると解釈されている。衆生は「世間の人々」ということを意味しているので、ここでは「其」が「世」に対応すると考えられる。このことから、「観其音声」＝「観世音」ということになるのである。本来ならば、この部分のみが観世音菩薩の「観世音」と名付けることに対する、鳩摩羅什による直接的な回答と言えるのではないだろうか。<sup>(14)</sup>

七難は総説の一文に対する例文としての側面を持つので、以下に、「観世音 (観其音声)」との対応関係を七難に当てはめて整理しておく。衆生の諸々の苦しみや悩みを詳しく説明した七種の難それぞれで、「観」「世」「音」の対象をまとめると、以下のようになる。

| 【七難】 | 【観】    | 【世】    | 【音】  |
|------|--------|--------|------|
| 第一難  | (持する心) | 名を持する者 | ——   |
| 第二難  | (称する声) | ——     | 称其名号 |

|     |        |           |         |
|-----|--------|-----------|---------|
| 第三難 | （称する声） | 遭難者の一人    | 称観世音菩薩名 |
| 第四難 | （称する声） | 殺されそうな者   | 称観世音菩薩名 |
| 第五難 | （称する声） | 悩まされる者    | 称観世音菩薩名 |
| 第六難 | （称する声） | 捕まっている者   | 称観世音菩薩名 |
| 第七難 | （称する声） | 怨賊に襲われる商人 | 称其名     |

第一難には、おそらく総説の「聞」を受けた文なので、直接的に「音」を示す語はないのであろう。また、第二難の「世」に相当するもの、すなわち世間の人々に当たるものは、第一難の「若有衆生」であると考えられるので、直接的に「世」に相当する語がない。

『正法華經』の場合は梵文とほぼ同じ文章になるが、総説の最後に「故名光世音」という一文が付加されている。これは総説が「光世音」と名付けられた直接の理由であると明言している重要な言葉である。しかしながら『正法華經』のこの文脈からは、「光世音」と名付けた理由がうまくなされないままに、総説をまとめている。

## おわりに

以上のように、鳩摩羅什は様々な仕掛けを施しながら、『観音經』において仏教の修行体系というものを確立しようとしてきたのではないかということが推測される。

梵文『観音經』が七難・三毒・二求両願・三十三身十九説法、布施（瓔珞の供養）を用いて示そうとしているのは、いかに仏教に入門することが容易であるのか、仏教への信仰を示すためにどのような行為が必要なのか、さらには観世音菩薩というわかりやすい救済者の活躍、という極めて初歩的あるいは基礎的な入門書としての役割であろう。おそらく古代インドにおいては、仏教の信者を集めるため、民衆に対して説法する際には、高度に発達した教理に対する議論ではなく、身近なたとえ話をはじめとする現世利益や布施の功德などの普通の人々にとってもわかりやすい内容を示すことこそが重要で

あったのであろう。これによって、厳しい環境にあるインドや中央アジアの人々の間で広く受け入れられる結果となったのであろう。

その一方で、鳩摩羅什訳『観音経』から見える姿は、経典としての文学的な美しさを与えただけではなく、仏教にのめり込み、深く信仰することを前提としながら、観世音菩薩に救いを求めることで、その心の叫びに答えてくれるというものに変えている。さらには、『観音経』を読んで、追体験しながら修行を実践することで、仏教に対する信仰心を作りあげ、仏道修行の方法を理解させようという真意があったのではないだろうか。そのためには、原典の持つわかりやすい仏教信仰だけでは安易な信仰に陥りかねないと考えた鳩摩羅什が、全体の流れを変えないよう留意しつつ、仏教教理に則した形になるように改変しながら、当時の中国の人々に受け入れやすい内容に変えたことで、深い観音信仰の礎となり得たのではないだろうか。

インド・西域・中国を経由して日本に入ってきた『観音経』<sup>(15)</sup>は、原典と翻訳者である鳩摩羅什の想いを汲み取ったかのように、観世音菩薩の示す威神力を求める多くの悩める人々の心の拠り所となり、中国において形成された観音信仰が日本においてもしっかりと根付いている。また、それを伝え続ける役割を担った仏教寺院においては、特別な法要や日常的な勤行の際に『観音経』を僧侶が読誦することでこの経典の響きの美しさを示し、それによって『観音経』と観世音菩薩の偉大さを受け入れる体勢の出来上がった人々に対して、法話などの題材として取り上げることで仏教の本質についてまでも理解させるための努力を続けてきたのであろう。これが「観世音菩薩普門品」という経題に込められた役割である「衆生が覚りへ顔を向けるはじめての一步」となっていると考えられる。

## 註

- (1) 観音の原語に関する研究は多数あるので、全ての研究を挙げて検討することは困難である。以下に代表的なもののみ挙げておく。本田 [1934]、辛嶋

[1998]、斉藤 [2011] [2013] [2017]、田中 [2014]、ほか多数。特に、斉藤 [2011] [2013] において、観世音菩薩の正体は、ブッダが仏眼をもって世間を観察したことで説法を決意した梵天勧請説話に基づき、「世間を自在に観察するブッダを具現化した菩薩」であるとする研究が示されている。

- (2) 吉澤 [2005]、[2008 : 290-293] を参照。
- (3) 吉澤 [2006]、[2008 : 304-308] を参照。
- (4) 吉澤 [2007]、[2008 : 315-337] を参照。片山 [2014] では、吉澤 [2008] において扱った法施の物語に関して、『維摩経』との関係からさらに進めた議論がなされている。
- (5) 本節に示す議論は、かつて吉澤 [2008] において検討し記載したものであるが、紙幅の都合により書き切れなかった内容についても、その後の研究をもとに再度検討することとしたい。
- (6) 奈良 [1997 : 235] は、本論同様に、この「発菩提心」が「悟りを開いた」ということを示すのではなく、「悟りを求めて努力していきましょうと発心した」と受け取るべきであると指摘する。
- (7) 吉澤 [2008 : 257-259] において、「聞是観世音菩薩」における「観世音菩薩」が菩薩の固有名詞ではなく、一般名詞、あるいは単なる「音の連なり」としての役割を持たせようとしていることについて、「以何因縁名観世音」の一文との関係から検討している。
- (8) 鳩摩羅什が「一心称名」の語を付け加えた可能性としては、nāmadheyam とあるところを、sam-ā-√dhā（集中する、専念する）に関連する語として読んでしまった、あるいは関連語が使われた原典を知っていたのかもしれない。『梵文法華経写本集成』の該当箇所によれば、ネパール系の紙写本のようなが、R、T3 の2写本には「nāmadheya」とあるはずの部分に「samādheya」の文字が確認できる。「nāma」と「samā」の文字が似ているので、単に写本を書き写した者が誤写しただけかもしれない。あるいは経典を受け継いだ Paṇḍit によって「nāmadheya」に修正されたものが伝承されていたのかもしれない。このことから「samādheya」「nāma-samādheya」「samādhi-nāmadheya」などの語が使われていた可能性は否定できない。
- (9) 散文部分の「持」は、偈頌部分では「念」に変換される。偈頌における「念

- 彼観音力」が「受持」を前提とした行為であるので「称名」ではなく「念仏」が強調されるのであろう。偈頌の分析については、稿をあらためて検討したい。
- (10) 三慧とは覚りを得るための智慧を段階に応じて聞慧、思慧、修慧の三段階に分類したもののこと。聞慧は教えを聞いて得る智慧、思慧は教えを思惟、考察して得る智慧、修慧は繰り返して修行することで得る智慧のこと。
- (11) ここでいう「修慧」は、三業の「身」に対応する礼拝供養の意味でいう身体修行ではなく、「bhāvanā（修習、薫習）」の意味であるので、ここに繰り返して修行することで智慧を生むということを表している。『観音経』の「宿殖徳本」は、まさしく長い輪廻転生の中で時間をかけて功德を積み上げてきた行為から表れた文章であり、かつ、たった一度でも高度な功德を積むことのできる「礼拝供養」を繰り返し行うことによって「智慧を備えた子供」が生まれるという、「修習」によって「慧」を生じることを暗に示していると考えたのではないだろうか。
- (12) ただし、サンスクリット語「Avalokiteśvara / Avalokitasvara」論争に触れるものではなく、鳩摩羅什による「観世音」についての検討であることを断っておく。私見ではあるが、竺法護の「光世音」についてはあらためて検討する必要があるが、鳩摩羅什訳『観音経』に組み込まれた構成から鑑みるに鳩摩羅什は īśvara（自在）ではなく、svara（音）となっているテキストを知っていた可能性が高い。本論でも触れている内容であるが、『観音経』自体が観世音菩薩の受持と称名／念仏をベースとした仏教の信仰をすすめている節がある。
- (13) 観世音菩薩の「即時」性については、上村〔1961〕を参照。
- (14) 齊藤〔2013〕が結論において指摘するように、「一心称名。観世音菩薩即時觀其音声」が「観世音」という訳語を与えることを正当化するために挿入・付加されたとすることは、本論の検討からも妥当と言えるのではないだろうか。
- (15) 本来、観音信仰の研究は『観音経』のみを主題として解明することは困難であり、密教における展開や仏教美術としての視点を無視することはできず、今後の課題としたい。

## 参考文献

### 第一次資料

『正法華経』竺法護訳、286年、大正蔵第9巻、No.263。

『妙法蓮華経』鳩摩羅什訳、406年、大正蔵第9巻、No.262。

『添品妙法蓮華経』闍那崛多・笈多共訳、601年、大正蔵第9巻、No.264。

*Saddharmapuṇḍarīka*, edited by H. Kern and Bunyiu Nanjio, Bibliotheca Buddhica 10, St. Pétersbourg, 1908-1912. Reprint. 東京：名著普及会, 1953, 1977.

荻原雲来・土田勝弥『改訂梵文法華経』= *Saddharmapuṇḍarīka-Sūtram*: Romanized and revised text of the bibliotheca buddhica publication. 山喜房佛書林, 1958.

梵文法華経刊行会『梵文法華経写本集成』= *Sanskrit manuscripts of Saddharmapuṇḍarīka*: collected from Nepal, Kashmir, and Central Asia. 第12巻, 立正大学, 1982.

渡辺照宏「蔵漢訳対照 梵文普門品」『渡辺照宏 仏教学論集』pp.173-219, 筑摩書房, 1982.

### 第二次資料

今西順吉「観世音菩薩の原語とその意義——普門品の分析を通して——」『伊藤瑞叡博士古稀記念論文集 法華仏教と関係諸文化の研究』伊藤瑞叡博士古稀記念論文集刊行会編、山喜房佛書林、2013。

大久保良順『観音経入門』大蔵出版、1995。

片山由美「『法華経』と『維摩経』——法施物語を中心として——」『印仏研』63-1、2014。

鎌田茂雄『観音経講話』講談社、1991。

上村眞肇『法華経を中心とする仏教教理の諸問題』春秋社、1980。

「普門品偈の一思想 (tatkṣaṇam) に関する考察」『印仏研』9-1、1961。

辛嶋静志「法華経の文献学的研究(2) 観音 avalokitasvara の語義解釈」『創価大学国際仏教学高等研究所年報』2、1998。

観音経事典編纂委員会編『観音経読み解き事典』柏書房、2000。

斉藤 明「観音（観自在）と梵天勧請」『東方学』122、2011。

「観音（観自在）と『観音経』——鳩摩羅什訳の謎をめぐって——」  
『伊藤瑞猷博士古稀記念論文集 法華仏教と関係諸文化の研究』伊藤瑞猷博士古稀記念論文集刊行会編、山喜房佛書林、2013。

「『法華経』とイーシュヴァラ」『三友健容博士古稀記念論文集 智慧の  
ともしび アビダルマ佛教の展開 インド・東南アジア・チベット篇』  
三友健容博士古稀記念論文集刊行会、2017。

勝呂信静「観世音菩薩と称名思想」『法華経の成立と思想』大東出版社、1993、  
1996。

田中公明「観音の語源再考」『印仏研』62-2、2014。

中野東禅『観音経』講談社、1990。

奈良康明『観音経講義』東京書籍、1997。

本田義英「観音訳語考」『仏典の内相と外相』弘文堂書房、1934。

松濤誠廉「観音経について」『佛教における信と行：松濤教授論文集』平楽寺書店、1967。

吉澤秀知「観音経研究ノート 「合掌向仏」の意味」『天台学報』第46号、2004。

「観音経研究ノート(2) 二求の構造について」『天台学報』第47号、  
2005。

「観音経研究ノート(3) 観世音菩薩の化身について」『天台学報』第48  
号、2006。

「観音経研究ノート(4) 無尽意菩薩の供養について」『天台学報』第49  
号、2007。

『全注・全訳 観音経事典』鈴木出版、2008。

キーワード 観音経、観世音菩薩、鳩摩羅什、称名